遠山霜月祭　和田

ＤＶＤ解説冊子

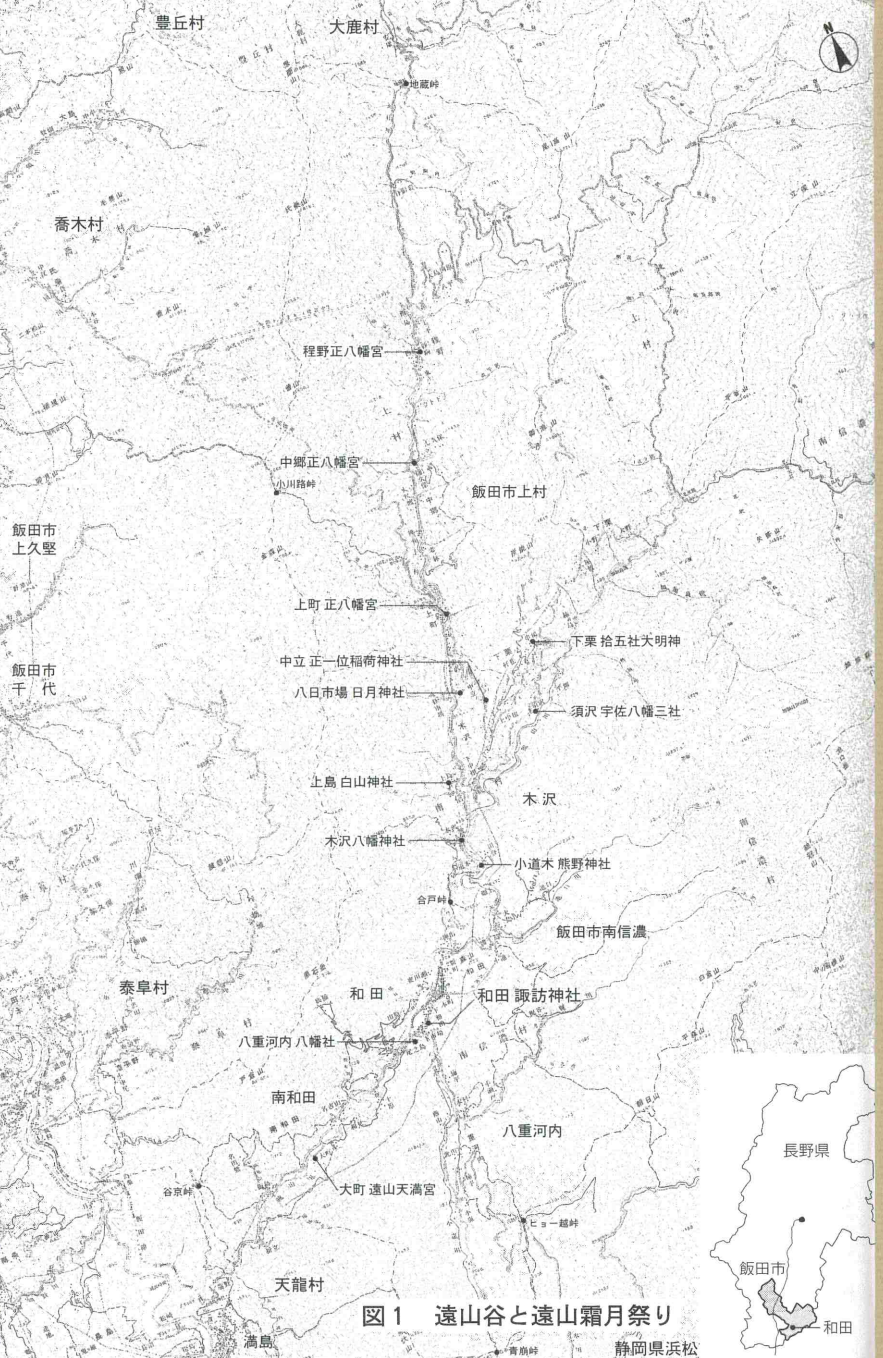


図1　遠山谷と遠山霜月祭り

遠山霜月祭　和田

DVDチャプターリスト

1	プロローグ	1′46″
〈12月12日　宵祭り〉		
2	宵祭り	15′14″
	祭花まつり　祭花作り　ぶく祓い　祭具作り	
〈12月13日　本祭り〉		
3	本祭り	15′21″
	清めの御神酒　浜水迎え　面迎え 釜洗い 湯の上飾り	
4	例大祭	3′22″
5	古典祭　湯の式　初参り	8′01″
6	踏みならしの舞	5′43″
7	湯開き	3′37″
8	神清め 宮清め	2′30″
9	一の湯	6′10″
10	下堂祓い	4′19″
11	二の湯	3′28″
12	神子の湯	3′01″
13	祝儀の舞　子供の舞	2′51″
14	鎮めの湯	7′13″
15	面下ろし	0′38″
16	やおとめ	1′30″
17	火伏せ	2′02″
18	面	14′20″
19	神送り	1′40″
20	粕舞	1′47″
21	ひいな降ろし	4′56″
22	金剱の舞	8′17″
23	スタッフ・クレジット	0′20″

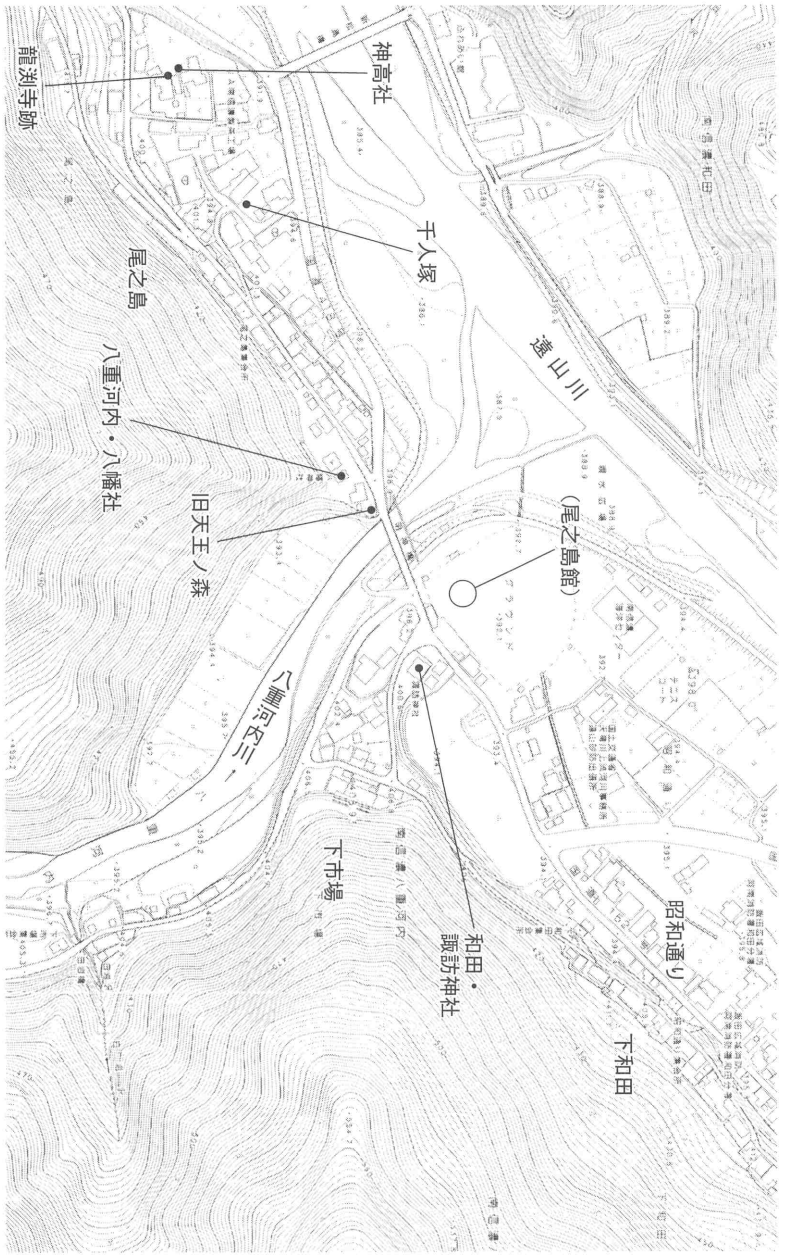


図2　和田・諏訪神社　周辺地形図

一　総　説

(一) はじめに

日本最大の活断層である中央構造線によって、赤石山脈と伊那山脈との間に深く刻まれた谷――遠山。この遠山谷に、国の重要無形民俗文化財に指定される「遠山の霜月祭」が伝承されている。現在の行政区でいえば長野県飯田市上村・南信濃、平成の大合併以前は下伊那郡上村・南信濃村であった。

全国山村の例外にもれず高齢化・少子化による過疎に悩む地域であるが、この地は豊かな林産資源の宝庫として注目されてきた歴史をもつ。平安時代末期に荘園が拓かれ、鎌倉時代には鎌倉八幡宮寺の信濃国唯一の神料地となった。南北朝時代には同じ中央構造線上の隣接地――大鹿村大河原に南朝方後醍醐天皇の第四皇子宗良親王が征夷大将軍として三十数年にわたって拠点を置いている。山深い地に遠山の霜月祭りが伝承される理由は、そんな時代背景があるのかもしれない。

のちに豊臣秀吉が大坂城の木材を、徳川家康が江戸城天守閣の木材を遠山から産出している。元和四年（一六一八）にこの地を領有した遠山氏が改易となったのも、遠山氏の相続争いを原因としたが、その背後には林産資源をねらう幕府の意図があったと考えられる。以後、幕府直轄領となり、木材で年貢を納める榑木成村となった。

(二) 遠山霜月祭りの特徴

遠山霜月祭りは、現在十二月中に九か所の神社で開催される（近年、須沢・上島・大町が休止）。この祭りは本来、その名のように旧暦霜月（十一月・神楽月）を祭り月とした。冬至における太陽の衰弱と再生になぞらえて、神も人も自然もすべての生命の「生まれ清まり」を願うのが、この祭りの本旨である。

祭りは、神社の舞殿中央に設けた竈や五徳に据えた湯釜に一晩中湯を沸きたぎらせ、神楽歌や舞を伴う湯立てをくり返し行う湯立神楽である。全国的にみれば湯立神楽は秋田県の保呂羽山の神楽、三浦半島一帯の鎌倉神楽、奥三河の花祭りなどがあるが、徹底して湯立てに固執するところに遠山の大きな特徴がある。同様な祭りは隣り天龍村の坂部の冬祭り・向方のお潔め祭りや、近接する富山の御神楽（愛知県豊根村）など、三遠信国境の主に南信州側一帯に分布する。それらは華やかな舞を中心として発展した奥三河の花祭りに比べて地味ではあるが、あきらかに湯立神楽の古態を有する。その最たるものが遠山霜月祭りなのである。

もう一つ、この祭りの特徴は、重病人や出征兵士などがその快復と無事を願って神々に誓約し、かなえられた場合に願果たしをおこなう重要な機会だったことである。この「立願（リュウガン・リッガン）」と「願ばたき」（願果たし）の習俗は戦後になって急激に廃れたが、それでもなお濃厚に形を留めている。ここに霜月神楽の本質ともいうべき深い信仰世界を伺い知ることができる。

その他にも、重要な湯立てや行事に先だって共食をくり返すなど、細部にわたって神祀りの古い形を留めている。この祭りはじつにさまざまな示唆に富むといえよう。

(三) 四タイプの祭り

遠山霜月祭りの内容は、地区ごとに類似性をもち、大きく次の四タイプ（系統）に分けられる。

上町タイプ：［上　村］上町（11日）・中郷（12日→第一土曜日）・程野（14日）　＊日付は12月
下栗タイプ：［上　村］下栗（13日）
木沢タイプ：［南信濃］中立／八日市場（隔年交互　8日→1日）・上島（第一土曜日　休止）・小道木（第一日曜日）・木沢（10日→第二土曜日）
和田タイプ：［南信濃］和田（13日）・八重河内（15日）・大町（23日　休止）

上町タイプは遠山川の支流上村川沿いの《遠山谷北部》に分布する。下栗・木沢タイプはともに遠山川中流域の《遠山谷中部》にあるが、そのなかで下栗はきわだった高地に位置する。和田タイプは遠山川下流域とその支流八重河内川沿いの《遠山谷南部》（和田・八重河内・南和田地区）に分布する。

四タイプについてみると、他と際だった違いを見せるのが**和田タイプ**である。湯立ては一口の湯釜を用いた三立のみで、内容も他に比べて独特である。舞は太鼓と採り物とする鈴の音のみで、湯釜の隅を立場として神事や舞をおこなう。

それに対して、他の三タイプは、二口（木沢のみ三口）の湯釜の周りで湯立てが一〇立前後も厳重にくり返され、舞にはさらに笛を伴い、神名帳奉読により全国一之宮の勧請するところに特徴がある。なかでも**木**

沢・下栗タイプは神楽歌を奏する際に銅拍子が付くほか、湯立ての内容や面の構成などに全般に共通性が認められて、古くは源を同じくしたものと考えられる。両者の違いは、木沢タイプが全般に簡素な印象を与えるのに対して、下栗は契印と呪文を数多くくり返すなど呪術色が強い点などである。

いっぽう**上町タイプ**は、個々の行事内容が複雑にして濃厚である。面は江戸時代初期の改易まで遠山地方を領有した遠山氏一族の御霊を象ったといわれる「遠山八社神」の陰が、祭り全体に大きく作用している。伝承では、百姓一揆によって遠山氏を滅ぼした祟りにより疫病が流行ったため、その霊を慰める祭りを従来の祭りに加えたという。祟り鎮めに重点を置いて再構成された形を、上町タイプの祭りにみることができる。

(四) 霜月祭りの全体日程

遠山霜月祭りは、一日一夜の祭りと考えられがちであるが、上町・下栗タイプでみるかぎり、本来は十二月一日の「きしめ造り」にはじまり、前日（一日目）に「宮支度」と「宵祭り」、その夜「お籠もり」があり、本日（二日目）～翌朝に「水迎えなど」「本祭り」、翌日（三日目）が「三日（算日・宮勘定）」である。

木沢タイプのうち、二社で隔年に霜月祭りを行う中立・八日市場においては、もう片方の神社で「朔日祭り」をおこなうものの、きしめは宵祭りに仕込む一夜酒となっている。和田タイプにはきしめはなく、宵祭りも準備を主体とする内容になっている。

祭りの内容は、宵祭りの日には、「釜塗り」と称する竈の作り替えや補修、「切り草」「祭花作り」と称する幣束などの紙飾りや注連縄綯いをおこない、祭具を整える。和田タイプを除いて、その夜の宵祭りでは神楽歌によって祭具を清め、神々のやってくる道を清める。宵祭りのあとは神社でのお籠もりがあった。旧習を最近まで伝えた中立・八日市場では、禰宜二名・湯木係一名・神迎え（神名帳の奉読役）一名・精舎のかしき一名が神社に泊まり込んだ。

翌日の「本日」は、湯立ての水迎え・釜洗いや湯の上飾りをして本祭りとなる。上町タイプや和田タイプでは午後一時頃からはじまる。木沢タイプでは夕刻に近い午後四時頃からであったが、近年になって早まっている。

本祭りは、まず神前での神事からはじまる。村社では神主による神道祭祀となるが、他は禰宜による大祓いである。そのあと、舞殿に下りてまず神楽歌祭場を清め、「神名帳」を奉読して全国一之宮の神々を迎えるなどして祈願し、以後、湯立てを夜通しえんえんとくり返す。

湯立てと舞には、恒例で行うべき「式礼」の行事と、本来は臨時的に行った「願（願ばたき）」の湯立てと舞がある。そののち、本来は夜明け近くになって、神社の祭神や地域の神々が面神となって登場する。そして神返しをして祭りを終えるのである。一旦自宅に帰って休息したのち、ふたたび神社に集まって片付けと決算報告をおこなう。これが「三日（算日）」である。

祭りが終了するのは、上町・中郷・程野では夜明け過ぎまでになる。木沢タイプも以前は同様だったが、木沢を除いて夜半に終了するように早めている。和田タイプも午前一時頃までに終了するが、かつては夜が明けたと伝わっている。

このように、遠山霜月祭りは、旧暦霜月の冬至の前後に、日没から夜明けにかけて本祭りをおこなうのが本来の姿であった。

二　和田の祭り

(一)　本ＤＶＤ映像とそのみどころ

①本ＤＶＤ映像

本映像は、平成二十二（二〇一〇）年、和田諏訪神社での遠山霜月祭りを撮影したものである。この映像記録事業は、南信濃遠山霜月祭保存会と遠山常民大学・飯田市美術博物館の三者を中心に、木沢は木沢上下自治会、和田は遠山霜月祭和田保存会が加わって結成された「南信濃遠山霜月祭映像記録作成委員会」が、文化庁の「ふるさと文化再興事業」の補助を得て実施した。祭りを取り巻く世情が変わり、その伝承が年々困難になりつつあるなか、祭りの姿をきちんとした映像に将来に残し、また現在の祭り継承に役立てようという目的である。そのため、撮影にあたっては一般カメラマンのフラッシュを禁じるなど、できる限り本格的な映像を残そうと努めた。とくに和田の場合には、十三年間絶えていた「神子の取り上げ」を復活し、また「粕舞」「ひいな降ろし」「金剱の舞」は古記録にある周数にもどすなどがおこなわれた。

先の映像記録作成事業によって得られたマスター映像はすべて飯田市美術博物館に保管され、その映像を編集して保存伝承用のＤＶＤも作成された。本ＤＶＤは、さらに祭りの内容をわかりやすく、広く紹介するために再編集して作成されたものである。

②和田の霜月祭りの概要

本ＤＶＤをみるにあたって、この祭りのごく簡単に概要についてのべておこう。

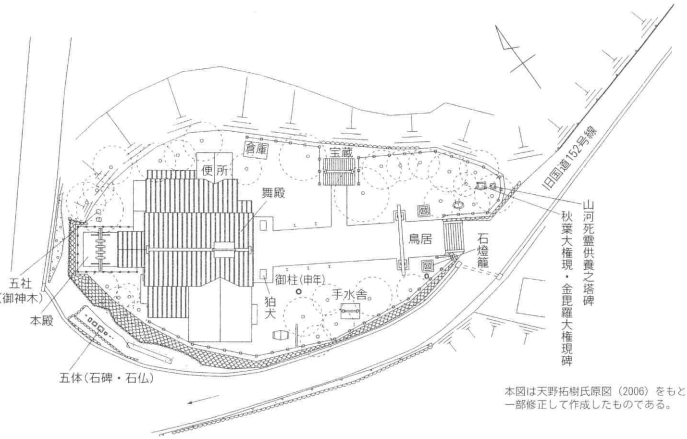
霜月祭りの日程　和田の霜月祭りは祭日が十二月十三日と定められている。映像記録のおこなわれた平成二十二年の祭りは下記の日程であった。

宵祭り　十二月十二日
本祭り　十二月十三日から翌日午前一時頃
三日（さんにち）（片付け）　十二月十四日午前

和田諏訪神社　この神社は、飯田市南信濃和田一五九七－一番地（大字和田字下市場一五九七番地　小字明神森）にある。標高四〇〇㍍。遠山川と八重河内川の合流地点に尾根状に突き出した台地上にあり、その先端は「尾之島館」とよばれる中世の城館址があった。

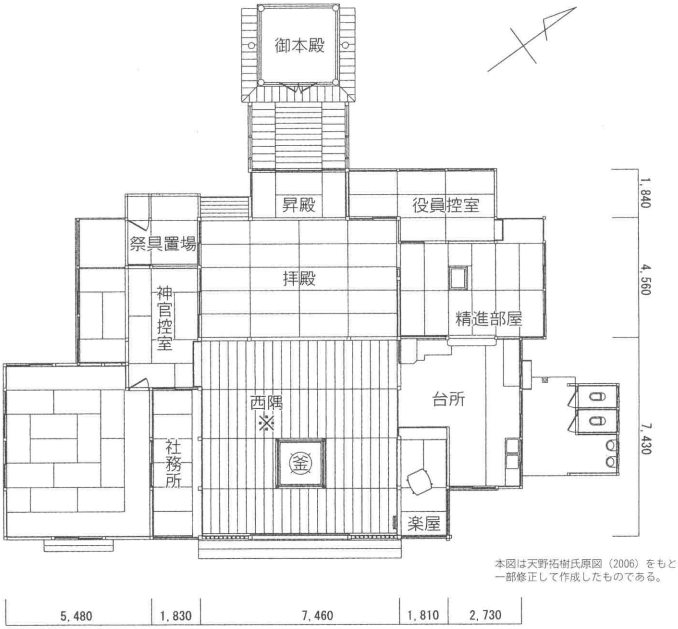
諏訪神社は、承久元年（一二一九）三月三日再建と伝えられる。現在の祭りは年九回あり、霜月祭りと並んで大きな祭りには毎年八月二十七日に御射山祭りがある。また、七年に一度の寅申年には式年大祭として御柱祭りが開催される。

祭りの担い手　和田諏訪神社は旧和田村・南和田村の住民を氏子とする。霜月祭りは各耕地から選出された氏子総代と、遠山霜月祭和田保存会とで開催される。前者が祭事（祀掌祭り）、後者が「古典祭」とよばれる湯立神楽の部分を担う。なお、遠山谷南部（和田・南和田・八重河内）の霜月祭りは、古くは八重河内梶谷の禰宜・小禰宜がまわり歩いて執行したものだった。



本図は天野拓樹氏原図（2006）をもとに、一部修正して作成したものである。

図3　和田・諏訪神社　配置図



本図は天野拓樹氏原図（2006）をもとに、一部修正して作成したものである。

図4　和田・諏訪神社　全体図

③和田の霜月祭りのみどころ

以下、本映像の特に推奨できる見所、留意点などを列記する。

神子の取り上げ　本映像で特筆できるのは、「神子の取り上げ」が十三年ぶりに復活されたことである。これは命の危機に直面して神に立願した者が、その加護によって無事だったときに、神の子になって一生涯の奉仕を誓う。遠山霜月祭りで現在これを伝えるのは他に中郷があるが、和田のそれはより丁重である。

浜水迎え・面迎え　奇数人数の保存会員によっておこなわれる。浜水迎えはかつては両親のそろった男女であった。面迎えは、八重河内川の対岸にある八重河内八幡社に保管される面を迎えにいく行事である。八重河内八幡社に基本となる一群があって、他の神社はそれを迎えて祭りをした伝統を受け継いでいる。

湯の上飾り・祭具　和田タイプの祭りの特徴は、十六・十二（閏年は十三）のほか、九字（四本と五本）、奇数などに強くこだわる点である。たとえば「湯男」は九字と日天月天の切り抜きからなり、穴の総計百十四は人間の寿命を表し、願いを叶える数とされる。また、湯の上飾りが六十一通りからなるのは還暦すなわち生まれ変わり（よみがえり）の数とされる。

西隅の重視　湯釜を五徳に据えた炉に向いて禰宜（太夫）がおこなう神事や舞は、常に実際の方位に近い西隅が重視される。これは太陽が昇る東に対する座であるからとされる。

湯立て　「一の湯」「二の湯」「鎮めの湯」の三立からなる。一の湯・鎮めの湯は十二人（閏年は十三人）、二の湯は六人となる。神拾いは非常に丁重である。

隅固めの舞　舞は面を境にして、前半に「踏みならしの舞」「下堂祓い」「祝儀の舞」、後半に神返しの「粕舞」「ひいな降ろし」「金剱の舞」がある。これらに共通する舞の型は「平舞」とよばれ、炉の隅ごとに

五方位を踏むこと（隅固め）を特徴とする。禰宜の言説では「木火土金水の五行の神に捧げる」といわれる。また、三三九度・天中地・順逆などの原理が仕組まれている。（17頁 図5参照）

神返しの舞　後段の神返しの舞は「粕舞」が一周半、「ひいな降ろし」が九周半、「金叙の舞」が五周半となる。この数にも七五三と同じ締め括りの意味がある。いずれも平舞の型を踏襲し、粕舞・ひいな降ろしでは「天地天地の舞」一周半が付く。その所作は陰陽の融合を、半周は神返しを意味すると考えられる。（30頁 図6・7・8参照）

面　面は八重河内八幡社に一括保管される四十一面を使用する。その構成は［水の王―火の王―神社の祭神―遠山氏一族・村内の神―神太夫夫婦―猿］である。

水の王（鎮め様）は両手を腰に当てたぎこちない足踏みで登場し、湯切りもあわせて湯釜を五周する。その歩みは鎮めを意味する星形となる。火の王も同様で、この二面で陰陽のセットをなす。

つづく行道面は水の王と同じように湯釜を三周するが、かつて「六十一歩踏んで帰れ」といわれたというから、よみがえりを意味する歩法であろう。

神太夫夫婦につづいて最後に登場する猿は、七五三に舞って五周半する。三三九度・天中地・順逆が仕組まれている。面形舞を締めくくり、災厄を去る（サル）意味がある。

以上のように、諏訪神社に代表される和田タイプの祭りには、非常に深い意味が込められている。祭りに寄せた祈願の深さを物語っているのである。

なお、和田の祭りについては、『遠山霜月祭　南信濃①〈和田・八重河内・南和田編〉』（飯田市美術博物館・遠山常民大学　二〇一〇）を参照されたい。

（二）和田の霜月祭りの式次第

宵祭り（十二月十二日）

準　備

午前八時に氏子総代と各自治会長一名、禰宜を含む保存会員が神社に集合する。境内や神殿・社殿の清掃、幟立て、薪の用意、祭具の蔵出し等をおこなう。

祭花祭り・祭花作り　神殿前で中折や麻、小刀・千枚通し・紙切り板を清める「祭花祭り」の後、御神体幣・湯飾り・湯木幣などの祭花作りに取りかかる。注連縄をない、祭具を整える。

本祭り（十二月十三日）

準　備

氏子総代と主禰宜は午前七時ころに神社に集まる。自治会長・保存会員は八時までに参集する。

清めの神酒　保存会員は神前で「清めの神酒」をいただく。

浜水迎え　五人前後の奇数人が隊列を組んで八重河内川へ行く。河原に山神・水神の幣を立て、浜水を逆水にならないように七柄杓半で汲み、浜砂（浜土）を包んで神社へもどる。

面迎え　五人前後の奇数人数が隊列を組んで、八重河内八幡社へ出向き、面箱を迎えてくる。遠山谷南部で共同使用する面が一括保管されているためである。

釜洗い（釜清め）　氏子総代が神社前庭においてタワシ十二個（閏年は十三個）を使って湯釜を洗い、カマドの五徳に据える。かつては両親のそろう者がつとめた。

湯のあて飾り　湯殿の木枠に縄を張って湯飾りを付け、カマドの周りの各隅に五本の八将神を立てる。

浜砂まき・浜水入れ　釜の周りの五隅に浜砂を撒き、浜水を「七柄杓半」で湯釜に汲み入れる。

火入れ　禰宜が西隅より五隅で火打石を三回ずつ打って一周し、西隅でマッチにて点火する。

式の大祭（社掌祭り）

午前十時から祀掌（宮司）により神社祭式に則って式の大祭が執行される。

古典祭

午後一時から「古典祭」といわれる湯立神楽の祭りとなる。保存会がおこなう。

一　湯の式（式の神楽）

太鼓を打つ楽頭一名を含む保存会員五名から七名が楽堂に上り、太鼓にあわせて神楽歌を奏する。宣命をはさんで、ふたたび神楽となる。およそ一時間かかる。

塩祓いをして手剣で九字を切り、「身楔ぎの祓」を唱える。楽頭が「打てば鳴る　鳴れば神の心に響くなり　神もろともに共に勇み喜ぶ」と唱えて太鼓を打ちはじめ、主座の禰宜が「式の神楽」のモトを唱え、他の禰宜は鈴を鳴らしてウラをとる。

○式の神楽「御神楽」（抜粋）

一　エン御竹にはしょうじのおしめ　アンヤーハー　いくえ引く　トンヤ
　サアいくえひく　七重も八重も　アンヤーハー　祝へ引く　トンヤ
一　エン式なれば　式程申す　アンヤーハー　式のじょう　トンヤ
　サア式のじょや　黄金の御戸を　アンヤーハー　押開き　トンヤ
一　エン白金や　黄金の御戸を　アンヤーハー　押開き　トンヤ
　サア押開き　神現れて　アンヤーハー　げぎよをほめす　トンヤ
一　エン〔東方〕の神々の　ます道を　アンヤーハー　清むには　トンヤ
　サア清むには　八浦の塩を　アンヤーハー　くみ上げて　トンヤ
一　エン〔東方〕の神々の　お渡る道を　アンヤーハー　あやはりて　トンヤ
　サアあやはりて　錦をしきて　アンヤーハー　むかえます　トンヤ
一　エン〔東方〕の神々の今ぞます　アンヤーハー　大虎を　トンヤ
　サア大虎を　かすみの内に　アンヤーハー　おはします　トンヤ
一　エン〔東方〕の神々の　今ぞます　アンヤーハー　長浜を　トンヤ
　サア長浜を　葦毛の駒に　アンヤーハー　尾をはませ　トンヤ

○神楽（抜粋）

一　エン冬来れは　たれかやしようず　アンヤーハー　北国の　トンヤ
　サア北国のしぐれのういをー　アンヤーハー　山しめす　トンヤ

○玉の神楽（抜粋）

一　エン〔○○神様〕には　玉の神楽を　アンヤーハー　参らする　トンヤ
　サア参らする　参らする　アンヤーハー　参らする　トンヤ

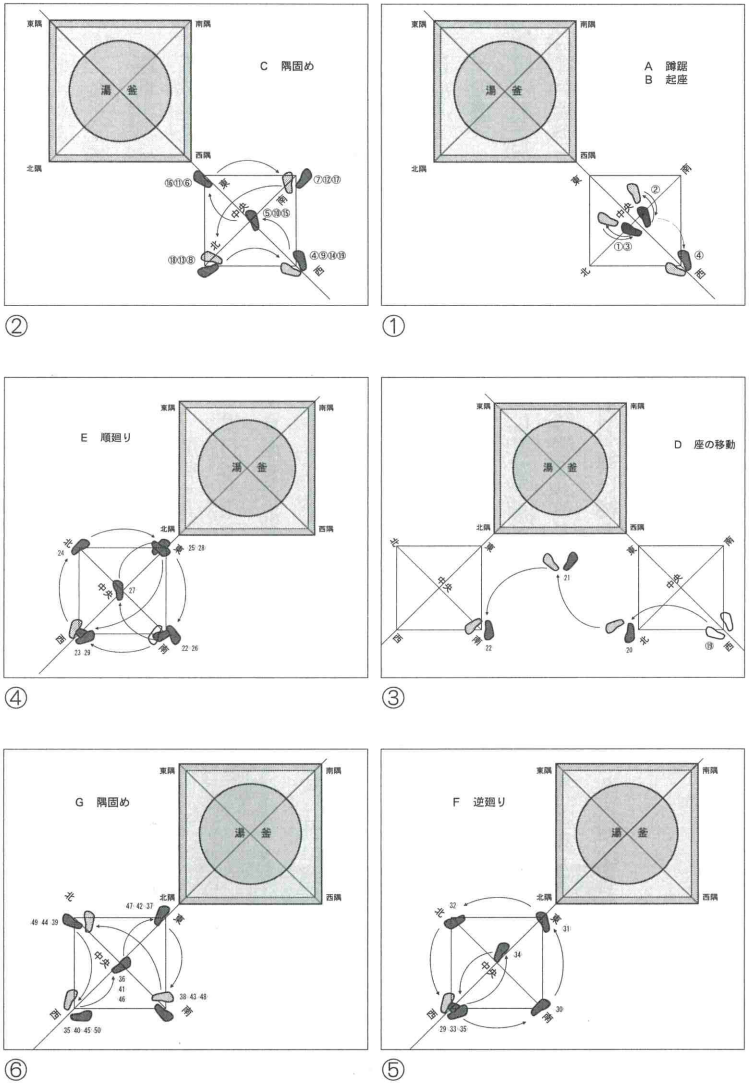
○湯殿清め（抜粋）

一　エン此の〔そさわら〕は　何所のわらよー　アンヤーハー　里こえて　トンヤ
　サア山こえて　遠山こえてー　アンヤーハー　七山こえて　トンヤ
一　エン庭ならし　たれかや生ずー　アンヤーハー　伊勢の国　トンヤ
　サア伊勢の国　要田が原のー　アンヤーハー　ねぎが生ずる　トンヤ
一　エン鶴亀の　ふみならしたるー　アンヤーハー　庭なれば　トンヤ
　サア庭なれば　悪魔はよせじ　アンヤーハー　ねぎが生する　トンヤ
一　エン悦びのなる　谷川を　アンヤーハー　渡りして　トンヤ
　サアいかに大社も　アンヤーハー　うれしかるらん　トンヤ

二　踏みならしの舞

四人舞の基本をなす舞で、「四つ舞」とも「四方舞」ともよぶ。四人の舞人（保存会員）が炉の四隅に立ち、扇と鈴を持って各隅で五方を踏みながら舞う。これを五隅でくり返す。一周目は閉扇、二周目は開扇で、三周目は急調子の太鼓にあわせたチラシとなる。

踏みならしの舞



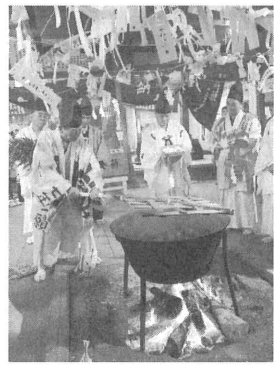
※黒い足形は基本的に踏み出し足

図5　踏みならしの舞（平舞）の足取り

三　湯開き

湯釜にかぶせた湯蓋の上に湯たぶさ・刀・鈴・湯木（シロタエ）を載せ、太夫が湯木一組を湯衣に包み捧げて西隅に敷いた荒菰の上に立つ。脇禰宜の塩祓いに次いで、太夫禰宜は「身滌の祓」「六根清浄の祓」を唱える。これを五隅でくり返し、祓幣を炉の西隅に立てる。つぎに湯蓋の上で湯木・鈴を扇で軽く三度打つことを五隅でくり返す。さらに鈴を扇に重ねての拝を五隅でくり返す。湯蓋・湯たぶさ・湯柄杓を両手に持って、湯蓋をとる呪文「手に取るや　湯たぶさを　子に伏せ　丑に起こし　寅に神を招じんビン　ヒョーシン」を唱え、「臨、兵、信（剣）」と釜の上に三度突き出す。これも五隅でくり返す。

その後、西隅に敷いた荒薦に座す氏子総代が広げる扇に、太夫が閉扇の柄と左手で釜の湯を三回すくい上げては汲み入れる真似を三回おこなう。



湯開き

四　一の湯

最初の湯立て。午後三時ころからはじまる。西角に立つ太夫禰宜を中心に保存会員ら計十二人（閏年は十三人）が両手に湯木を持って湯釜の周りに並ぶ。まず姫舞（湯ばやし）を三周舞う。三周目はチラシとなり、太鼓は急調子となって舞も早まる。三周を舞い終えて元の位置に立つと、全員が釜を向いて両手に湯木を持って左右に身体をゆらしながら、楽堂の太鼓にあわせて神楽歌をうたう。

○湯立ての神楽歌

一　おんしろたえをもろ手に持ちて　アンヤーハー　おがむには
一　エン〔東方〕の神々をもろ手に持ちて　おがむには
一　湯の父のゆどのへわたる　アンヤーハー　おがむには
一　湯の母のゆどのへわたる　アンヤーハー　おがむには
一　湯どのこそ神はよろこぶ　アンヤーハー　おがむには

全員が湯木二本を重ね持って釜の上に差し出し、左右左右とゆらしながら、「火ぶせ」を唱える。最後に湯釜の上に湯木の頭を伏せる。

○火ぶせ

一　ゆらりとさらりと沸きくるお湯は　もりさえよれば　となかの清水
　ソレたまとる　たまとる　たまとるらんよ　火伏せもさかえて玉もほろろ

つぎに、太夫禰宜が神名を唱えると「お湯召す時の…」とウラをとりながら右手に重ねて持った湯木を湯に軽く入れ、雫を神々に捧げる。「日光月光へ……」につづいて、「大社」「全国一の宮」の名を告げて歩く禰宜（神別）にしたがって、各自がそれぞれに湯を奉る。

○神拾い（大社・一の宮）

一　日光日光へ　　お湯めす時のおみかげこぐそ
一〔天照皇大神〕へ　　お湯めす時のおみかげこぐそ

太夫禰宜が「村内の神」の名を呼び上げてまわる。最初に祭りをおこなう神社の神様、たとえば和田では諏訪神社からはじめる。最後に全員で「残らずの神々」に湯を献ずる。

一の湯

○神拾い（村内の神）

一〔諏訪神社〕へ　　お湯召す時のおみかげこぐそ

神ひろいを終えると、ふたたび姫舞となる。三周目はチラシとなり、四周目は「ウォー」と叫びながら釜を一周して拝殿際に神前を向いて整列し一礼して終わる。

五　神清め・宮清め

太夫禰宜（神別）が釜の湯を湯桶へ「七柄杓半」に汲んでから湯釜にもどし、ふたたび同じように七柄杓半に汲み入れる。そして炉の五隅に立てた八将神の幣の元に少しずつ柄杓で注いで清める。

太夫禰宜は湯たぶさで湯桶を叩きながら「七釜や八釜のお湯を……」とうたって湯を振りかけ、その後ろに脇禰宜らが付き従ってウラを唱和する。

○宮清め

一　七釜や八釜のお湯を汲み上げて
　諏訪神社様の〔湯釜〕を清むには清むには

◇夕　食

保存会員は酒と味付飯と漬物だけで夕食をとる。

◇子どもの舞

午後四時ころ、小学校三年生以上、中学生二年生までの子どもたちによる舞の奉納がある。

六　下堂祓い（外道祓い）

「扇剱（せんけん）の舞」ともよぶ。踏みならしの舞と同じ四つ舞を扇と剣で舞う。まず扇の舞で三周したのち、剱の舞となる。刀の鞘を三回なでる「刀改め」をしてから、一周目は右手に鈴を持ち、左手で腰の刀の柄頭をおさえて舞う。二周目は刀を抜いて舞い、三周目は調子を早めたチラシとなる。

七　二の湯

午後五時ころからはじまる。この湯立ては天上、神別、村別（四人）の計六人となる（現在は保存会員）。姫舞（天上の姫舞）から「火ぶせ」まで一の湯と同じであるが、大社・全国一の宮・村内の神に対する神拾いは「古いけんぞく」を付けて唱える。最後は姫舞で終わる。

八　願ばたき（御神楽・金湯・神子）

「神子の願」や「御神楽の願」（健康祈願）、「金湯の願」（家清め）の願ばたきをあった場合、二の湯と同時かその後にその願ばたきの行事を挿入した。願がかなった者は当日社務所へ申し出る。

九　神子の取り上げ

神子役を西隅に敷いた荒菰に座らせ、背後に禰宜一人（天上）が「湯衣（ユゴロモ）」（水干）を持って立ち、神子をはさんで左右に二人の禰宜（神別・菰引き）が立ち、お湯にかざした湯たぶさ（笹）を神子の頭上に交えて両者で取り付く。天上がモト「赤ねを手に入れ……」、神別がウラ「生まれるも……」をうたいながら、神子の頭上で笹をまわすことを三回くり返す。最後に神別二人は交えた笹をさっと離す。

天上が「神の鎧着せ給え守護奉れ」と唱えて本人に上着を着せると、周囲の者（脇禰宜など）が本人に代って「内夫十六人　外夫十六人……」を唱える。このとき、周囲が「生まれたよ　ソレ生まれたよ　生まれたばっかに毛がはえたー」などとはやす。

○神子を取り上げるときの歌

モト　赤ねを手に入れ袖に入れ育つるは
ウラ　生まるも育つも知らぬ人の子に　舞衣を着せて神の子とする　（三回くり返す）

○神子に水干を着せた後の周囲の詞

内夫十六人（うちおっと）　外夫十六人　合わせて三十二人
後は四方開　これより万が日のご奉公相つとめ申す

湯衣を着せた神子を禰宜二人がはさむようにして姫舞を舞う。このとき神楽歌が付く。三周目はチラシとなり、その後「ウオー」と叫びながら釜を一周して、神前に整列し一礼して終わる。

○神子の姫舞の謡

モト　エン若禰宜の舞出る姿　アンヤーハー　花とめす　トンヤ
ウラ　サア花とめす舞出る姿　アンヤーハー　花とめす　トンヤ
モト　エン若宮の舞出る姿　アンヤーハー　花とめす　トンヤ
ウラ　サア花とめす舞出る姿　アンヤーハー　花とめす　トンヤ
モト　エン若神子の舞出る姿　アンヤーハー　花とめす　トンヤ
ウラ　サア花とめす舞出る姿　アンヤーハー　花とめす　トンヤ

十　祝儀の舞

「神子取り上げ」の後、神子から祝儀をいただいて舞う。舞は剱（刀）と鈴による四つ舞である。一回目は刀を腰に差し、二回目は刀を抜いて舞う。三周目には「オコナイ」（「立切」）とよぶ所作が入る。四周目は調子を早めてチラシで一周する。

祝儀の舞

十一　鎮めの湯

天上・神別・氏子計十二人（閏年は十三人）による湯立て。姫舞の後の神拾いは一回目は一の湯と同じで、二回目は村の中の神々だけに「神甲主（かみこぬし）」という句を付ける。三回目は村内の神々だけに「神甲主のむえんの御神一社ももらさず」という句を付ける。四回目は「海道割」、五回目は「谷割り」を唱える。六回目は「残らずの神々」となり、「天の御宮　成神太郎　州の御神……」などが付く。

○神拾い（抜粋）

一〔諏訪神社様〕の　神甲主へ　［二周目］
　お湯召す時のおみかげこぐそ
一〔諏訪神社様〕の　神甲主の無縁の御神一社も残らず　［三周目］
　お湯召す時のおみかげこぐそ
一〔東海道十五ヶ国〕の　高い大神　低い小神　諸神の御神　一社も残らず　［四周目］
　お湯召す時のおみかげこぐそ
一〔青崩山入〕の　山の御神　水天宮　無縁の御神一社も残らず　［五周目］
　お湯めすときのおみかげこぐそ
一〔天の御宮　成神太郎　州の御かど　州の御命州（みこと）の御幡所当所（ごしょとうしょ）のくぜつの御神〕　［六周目］
　お湯召すときのおみかげこぐそ

最後の姫舞は「日月の舞」とよばれ、謡いが入る。一周目して自分の立場にもどったときに謡いを入れる。三周目は姫舞のチラシで、最後にワオーと声を上げ、神前で一礼して終わる。

○日月の舞

一　エン日月のお渡る道を　アンヤーハー　あやはりて　トンヤ
　サアあやはりて　にしきをしいて　アンヤーハー　迎えます　トンヤ
一　エン日月の遊びするまに　アンヤーハー　夜がふけて　トンヤ
　サア夜が更けて務めてからは　アンヤーハー　いかに大社も　アンヤーハー　うれしかるらん

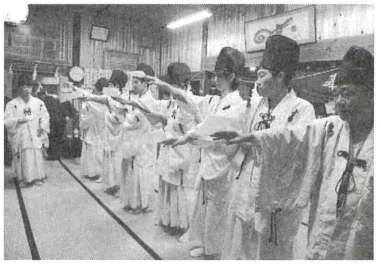
十二　やおとめ

面箱を拝殿奥に下ろし、水の王面を取り出して三方の上にのせて祀る。

水干を着けた舞手（保存会員）五名ないしは七名が拝殿に向かって横一列に立ち、二つ折にした中折（帖紙）を右手の中指ではさんで、禰宜の謡いに合わせて右上から左右にゆらりゆらりと振る。謡いの途中で体の向きを左廻りに変え、ふたたび向き直って振り、一礼して終わる。

○やおとめの謡

やおとめ　やおとめ　奈良のやおとめ
長さらそいて姫にゆずらず
ヤーラ悦びの　悦びの　如くならば　玉の舞家を　吾ぞ照する
ヤーラうれしきは　うれしきは
昔は袖に包みしが　今はたもとにあまりこそすれ
ヤーラ悦びの　悦びの　成る谷川を渡りして
いかに大社もうれしかるらん　うれしかるらん
大社もうれしかるらん



やおとめ

十三　湯伏せ

太鼓が「テンテコテーン　ガッタガタ」と囃しはじめると、西隅の荒菰に立った太夫が「身滌の祓」を唱え、両袖を合わせた袖の中で「雌獅子」、九字の印を結んでから両手を湯の上に伏せる。これを五隅でくり返す。さらに西隅で「水を求める」と祓幣の先で湯に書いて湯木を底まで突き立てる。そして袖の中で雌獅子の印を結び、火伏せ湯伏せの呪文を唱えて水の王を待つ。

十四　御面形

1　**水の王**　湯が静まると、水の王が両手を腰に当てた「六方」とよぶ歩みで登場する。一周目は両手を腰に当てたままで、二周目は両袖の中で雌獅子の印を結び、両手を湯の上に伏せることを五隅でくり返す。三周目は釜の湯をかける真似をし、四周目は釜の湯を素手を跳ねとばす。五周目は両手を腰に当てて一周して引き上げる。すると、西隅で湯伏せをしていた太夫は雄獅子の印を結び、火をおこす呪文を唱える。

2　**火の王**　水の王が帰ると、氏子総代が火の王面を着けて釜の周りを六方で三周する。

3　**諏訪大明神**　三番目は諏訪神社の祭神面となる。氏子総代長が六方の歩みで三周する。

4　**村内の神・遠山氏一族**　以後、村内の神面を特志者が着けて六方の歩みで三周する。正八幡、伊豆権現、大野田様、愛宕様、関の御神、関の明神、大山住神、半僧坊、金比羅様、みだ八幡様　関の御方、三条神社、大がみ

金釼の舞

神社、水天宮、大宮姫の命　天満宮、湯の権現　城神社、山の神、稲荷様。遠山氏一族関係では遠山様（一面）、遠山若党（六面）等がある。以前は面を自治会割り当てたが、現在は村外の希望者にも舞ってもらう。

5　**神太夫・姥**　姥は「ションベンバアサ」とよばれ、細目女神といわれる。右手に湯たぶさを持ち、女物の着物に帯を締めて、釜の周りの観客の頭を笹でなでながらまわる。観客がからかうので、婆さは湯たぶさで叩いてまわる。やや間をおいて神太夫が登場する。「ジイサ」とよばれ、猿田彦命ともいわれる。湯衣に烏帽子を着け、扇を持ち、腰に刀を差して、「エヘンエヘン」といばって歩く。神前より登場して半周したところで、禰宜（または保存会員）による「関所守」役に行く手を遮られて問答となる。ついに問答に負けて身につけた物を取り上げられると、婆さと抱き合って元来た道をもどる。このときに伊勢音頭と手拍子で盛り立てる。

6　**猿**　最後の面で「猿楽」ともよぶ。全身赤の筒袖に奴袴、足袋をはいて、頭に麻を編んだ頭毛をかぶる。湯木幣をまとめた湯たぶさを左手に持ち、もう一つを尻の尾にする。まず神殿に向かって「天照大皇神　諏訪大明神　猿田彦大神　無事舞わさせ給え」と祈願し、禰宜の謡いにつれて神前で座って舞う。

○猿舞の謡い

禰宜　これは元より神風の　伊勢の国での取入る姿は　八将神の道
　又は車に打ちのりて　あこふが方へ出でにける
ウラ　ハーヤー

謡いが終わると舞殿に下り、カマドの西隅へ行って舞いはじまる。猿舞は五周り半で「七五三に舞う」とされる。一周目は、太鼓に合わせて七回飛び上がる（「煽る」）。このとき天へ両手を煽り、顔の横で振りながら立って右廻りにまわる（「立ち廻り」）。つぎに七回飛び煽り、立って左廻りし（「廻りほどく」）、ふたたび七回飛び煽る。結局、七回ずつ順・逆・順に飛び煽ることを、順・逆の立ち廻りをはさみながら三回したことになる。以上を五各隅で舞う。次の隅へ移動するときは中腰で、扇や湯たぶさを前で振ったりする。

二周目は、飛び煽る回数が五回ずつとなり、順・逆・順にくり返す。この間にはさむ回転は、中腰で両手を腰に付けて扇と湯たぶさを振る「腰廻り」となる。

三周目は、飛び煽りは三回で、片足を伸ばして片膝を立てる「座り廻り」となる。

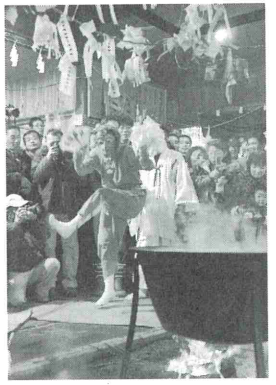
四周目は、三回飛び煽りに「立ち廻り」で一周する。

五周目は、各隅で飛び煽りを三回するのみで回る。五周目の西隅を終えると、同様な三回の飛び煽りで東隅まで半周し、西隅へもどって終わる。

神前にもどると、禰宜の謡いにあわせて座って舞い、最後に神前に一礼する。

○猿の謡い（入る時）

禰宜　ヤーラうれしやありがたや　君もろともに吾らまで　ごしやくが方へと入りにける
ウラ　ハーヤー


猿

十五　神送り

「申しの三合」ともよぶ。太夫禰宜とモズ係二名、脇立ち一名の計四名で、西隅より五方でおこなう。太夫が「身滌の祓」して「宣命」を読み上げる途中、「押付けもんず」のところで、太夫の前で向い合ったモズ係二人が、小腰をかがめ右手に持った笹を腰に当てて鳥が羽ばたくような振りで「キチキチキチキチ（吉吉…）」と唱えながら五回入れ替わる。最後に「又来る明年も神迎えして　神送りして返す」とくり返す。一同、釜を向いて一礼してから引き上げる。

十六　かす舞

サイの目に刻んだ大根と豆腐のカスを載せたお盆を、目通しの高さに捧げて平舞で舞う。この舞は、神返しした後も残る招かざる神に対して、もうカスしか残っていないことを示す舞だとされる。平舞を西隅のみで舞う。舞人が「大荒神となる」とうたうと、周りの人が「小荒神となる」とウラをとる。立場廻りをして二周目に入ったときに「山のふだちの……」の謡いが入る。北隅に移るときに「粕に大根手づかみよ……」と舞人と禰宜が双方で唄い、右手でカスを撒き散す。最後に、早調子の太鼓にあわせて「天地天地の舞」を舞いながら一周し、さらに北隅まで半周してもどる。

○かす舞の謡い（立場回り二周目）

一　山のふだちの召すものには　峯へ登りては尺なぎトンヤナ
　　サア沢に下りては　ささぎ豆ざいよ　しのぶは神とな
一　粕に大根手づかみ　山峯化粧舞名こそちのみや　粕大根手づかみ

十七　ひいな降ろし

舞人一人が西隅に湯たぶさと鈴を持って平舞で一周する。二周目も平舞で「宵にゃ神楽……」「舞う人は一せも……」の唄が入る。三周目は白紙を持って舞い、四周目に身をかがめて白紙を破りかけながら一周する。五周目は紙を破って五隅に置きながら「やぶれ紙は千枚よ」と唱え、六周目に「何尋」「千尋」と唱え紙を拾いながら一周する。七周目は五隅の八将神を拾い上げながら「八将神をすでに……」「舞う人舞うやな……」と唱え、最後に西隅で紙と八将神を火中に投げ入れる。八周目は湯たぶさを持って「ゆたぶさを常に……」「舞う人舞うやな……」と唱えて舞う。その後、天地天地の舞で一廻り半する。以上、ひいな降ろしは計九周半となる。

○ひいな降ろし（二周目）

一　宵にや神楽　夜中にや静め、あかとき、ひいな降し舞う人舞うやな
　　舞う人は一せもさかえて泰刀まします

○ひいな降ろし（七周目）

一　八将神をすでに焚木にする人は舞うやな
　　舞う人舞うやな一世も栄えて泰刀まします

○ひいな降ろし（八周目）

一　ゆたぶさを常に焚木にする人は舞うやな
　　舞う人舞うやな一世も栄えて泰刀まします

十八　金剱の舞

一周目は、舞人一人が湯たぶさと鈴を持って平舞を舞う。これには必ず「鈴割り」を入れる。二周目は、

ひいな降ろし

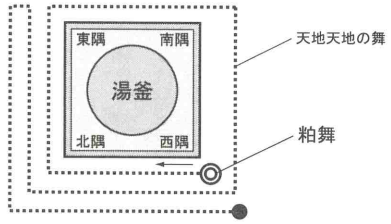


図6　粕舞（1周半）

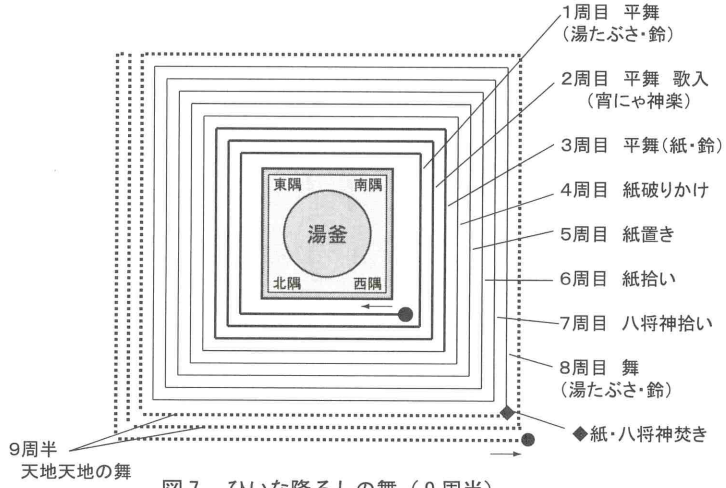


図7　ひいな降ろしの舞（9周半）

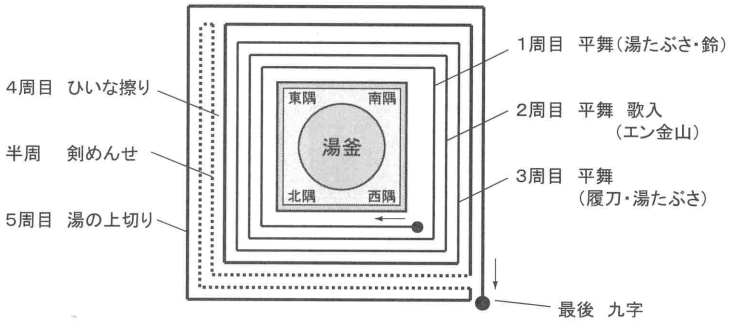


図8　金釵の舞（5周半）

襦宜がかぶせる蓋の上で、舞人が湯たぶさを叩くように鈴を振りながら「エン金山の一の大じの…」をうたい、周囲の者が「サー金釵天地を別けて…」とウラをとる。うたい終わると同時に舞人は跳ね起き、襦宜が湯蓋を取る。つぎの北隅でも同様にして舞人が「エン帝釈の腰に召したる…」、周囲の者が「いば刀天地を別けて…」とうたう。東隅では「エン金山の一の大じの…」、南隅では「エン帝釈の腰に召したる…」、西隅にもどって「エン金山の一の大じの…」をくり返す。

○金釵の舞（二周目　西隅・東隅・西隅）

一　エン金山の一の大じの　アンヤーハー　金剣　トンヤ
　サー金剣天地を別けて　アンヤーハー　参らする　トンヤ

○金釵の舞（二周目　北隅・南隅）

一　エン帝釈の腰に召したる　アンヤーハー　つば刀　トンヤ
　サーいば刀天地を別けて　アンヤーハー　事もあらじ　トンヤ

三周目は、左手で腰に差した刀の柄を押さえ、右手に鈴を持って平舞を舞う。四周目は刀を半分抜いて両手で目八分に捧げて、ひいなを摺るようにして早調子のチラシで舞う。つぎに刀を抜いて腰をかがめて小声で「釵めんせ」と五回唱えながら東隅まで半周し、西隅まで後ずさりするときに、舞手が「釵めんせ」と声に出していうと、周囲の人が「八釵めんせ」と大声でウラをとる。計三回唱和する。

西隅にもどると、釜を向いて「釵の文字は」と叫び、周囲の人は大声で「湯の上の外道は抜いてこそ払えよ」と唱える。五周目は「ホンヤラホンヤラ」と言いながら湯飾りを切り捨てる。以上、五周半となる。

最後に刀を釜へ構えて立ち、「天は吾が父なり、地は吾が母なり、南と北との極如、東西、南北、中天、

前主尺、ごげんぶごげんも」と唱え、ついで「臨兵闘者皆陣裂在前」と唱え、両足を力強く交互に足を踏み代えながら刀を九回突き刺す。「日月の印」「八束の印」を結んで終わる。

その後、湯開きと同様に、西隅の荒薦に正座する氏子総代の扇に、舞手が湯たぶさの柄と左手で釜の湯を三回すくい上げて汲み入れる真似を三回くり返す。これで一切の式を終了する。

万歳　参詣者全員で神殿を向き、太夫の音頭で「万歳」を三唱する。

直食　禰宜、氏子総代をはじめ関係者一同が神前に集まり、神酒を汲み交わして「オジヤ」を食べて御開きとなる。

三日（片付け・会計報告）　十二月十四日

翌日、午前十時より関係者一同が神社に集まって、それぞれ後片付けをし、会計報告をする。

凡　例

映像記録・DVD

・本映像は、平成22年（2010）に開催された和田諏訪神社における遠山霜月祭りの記録である。
・この映像記録は、「南信濃遠山霜月祭映像記録作成委員会」が、文化庁の「平成22年度 ふるさと文化再興事業」の補助を受けて行ったものである。
・撮影の日程は次のとおりである。
　宵祭り　　12月12日
　本祭り　　12月13日
　片付け　　12月14日午前
・撮影にあたっては、祭りの全行事の記録を心がけ、後世に残すにふさわしい映像を残せるようにとカメラによるフラッシュを一切禁止して行った。その全マスターテープは飯田市美術博物館に保管している。
・本DVDは、先の記録映像をもとに編集し仕上げたものである。和田分の事業については次のように担当した。
　企画：南信濃遠山霜月祭保存会・遠山霜月祭和田保存会
　　遠山常民大学・飯田市美術博物館
　協力：文化庁・長野県
　　飯田市・飯田市南信濃自治振興センター
　監修：飯田市美術博物館
　撮影：TV-4・ヴィジュアルフォークロア
　制作：ヴィジュアルフォークロア

解説冊子

・本小冊子は、DVD「遠山霜月祭〈和田〉」の解説書として添付するものである。
・詳細は『遠山霜月祭〈南信濃①　和田・八重河内・南和田編〉』（飯田市美術博物館・遠山常民大学　2010）を参照されたい。
・本書の執筆・編集は、櫻井弘人が行った。

遠山霜月祭　和田
DVD解説冊子

発　行　日　平成23年12月1日
編集・発行　飯田市美術博物館
　〒395-0034 長野県飯田市追手町2-655
印　　刷　株式会社　秀文社
　〒395-0043 長野県飯田市通り町1-2